

今、そこにある奇跡

みなさんは毎日、新聞やニュースを見ていますか？

そこには東日本大震災で大切なご家族やご親戚を亡くされた方の悲しみの声があふれています。

震災だけではありません。川で溺れて亡くなってしまった小学生。イジメを苦に自殺してしまつた中学生。遊ぶお金欲しさの孫に焼殺されたお婆さん。新聞記事などにとりあげられなくても、平成二二年一年間に交通事故で亡くなつた方は全国で四八六三人。千葉県だけでも一九八人もいます。

私が小さかった頃、出かける時は必ず「行ってきます」と言え、と強制的に父と約束させられました。今無事で出て行つても、その日の夜、全員が必ず無事で会えるとは限らない。今、この瞬間の別れが今生の別れになるかもしれない。だから、気持ちよく家を出て行くべきだ、と普段、口数の少ない父が語っていたのを覚えています。それからは激しい親子ゲンカをして、不機嫌極まりない時でも「行ってきます」だけは言っていたような気がします。

今、皆さんが無事に生きていて、創学舎に通つていられる、というのは、奇跡のように幸福なことなのです。普通に歩いてるだけなのに、ブレーキとアクセルを踏み間違えた暴走車に轢

かれて即死してしまつた小学生の話聞いたことがありません。

なぜ、皆さんが学校へ行ったり来たりしている時に、暴走車が皆さんを襲わないのか？なぜ、数限りなくある死に至る病にかからず、健康に生きていられるのか？皆さん本人だけではありません。ご家族も平穏無事に暮らしていらつしやる。その理由が説明できますか？

ただただ「運がいいから」。

この幸運を感謝しない、というのは、人間として間違つていると思います。生きていられるだけでもありがたい。「いつも

の生活」が「いつも」あることは、実は綱渡りのような幸運の連続によるものなのです。塾に通わせてもらえるなんて、世界の実情からすれば、貴族中の貴族と言えます。

今、皆さんは色々悩みや苦しみがあるかもしれませんが、それでも皆さんが幸福であることは、間違いありません。まずは、感謝出来る人であつて欲しい、と心から願います。

少々、宗教的な話になりました。今年の5月中旬、江戸川台教室を開校し、本当にたくさんの生徒・保護者の方が教室を訪れてくれました。感謝の気持ちを一番忘れてはいけないのはこの私かもしれません。

(瀬野)

高三生よ！受験生になれ！

●早いもので、もうすぐ七月。入試が二月とすれば、一月末まで、あと八カ月。そろそろ気持

ちを引き締めて頑張りたいところだ。

●さて、塾や予備校に通う高三生は、来年受験するつもりでいるはずだ。そして、何とか合格したいと願っているはずだ。しかし、その大半は、まだ受験生ではない。ただの参加者にすぎない。残念ながら、創学舎に通う生徒も同じだ。そして、単なる参加者は、受験で目標を突破することはできない。早く受験生になれ。

●ところで、単なる参加者と、真の受験生はどこが違うのか？それは気迫と行動の違いである。気迫に満ちている人は受験生である。積極的に行動している人は受験生である。たとえ浪人生でも、気迫が足りない人、行動が伴っていない人は夢を手に入れることはできない。二浪して志望校に合格する人は、二浪したから合格したので



はなく、二浪目に本気になって行動したから合格したのである。

●きみ達に話を戻すと、ほとんどの高三生は、年末になると顔付きが変わる。残された時間と今の自分の学力、そして志望校のレベルをようやく実感する。(そして必死があがく。)だが、わずかに二、三カ月の受験生に女神が微笑することとはあり得ない。気迫に満ちて行動する受験生に、一日も早く変わらなければならぬ。

●では、どうすれば受験生になれるのか？実はこれが難しい。志望校が決まらない、進学の意味はそれ程強くない等、様々な悩みも抱えているだろう。個別に対応すべき問題もあるだろう。しかし、ここでは、進学の意志があり志望校が決まっている人に話を絞る。

(一) 残り時間を計算する。そして、三月〜六

月までやってきたことを冷静に振り返ってみる。

(二) 志望校を見に行く。オープンキャンパスに参加。受験のイメージがより具体的になるはずだ。

(三) 各科目で使うものを再度確認する。やり方も再度確認する。そのとき、手を広げすぎないことだ。受講している科目があれば、指示された副教材とテキストに絞ること。

(四) 科目が多いときは、その科目の重要度により始める時期をずらすこと。例えば、国立文系の人の理科は秋から。国公立理系の人の社会は秋から。こういうと「それから間に合いますか？」と必ず聞かれるが、それはやり方次第。

はつきりしているのは、自分にとっての主要科目を早く仕上げるのが優先であつて、それができれば、秋からでも残りの科目は間に合うということ。大体、初学者が、あれもこれもと手を出して、力がつかないのだ。科目を絞つて、徹底的にやる。このテキストなら、どこを聞かれても大丈夫というところまで繰り返す。

そうすることで、実はきみの学力だけでなく学習能力も上がり、今まで手をつけなかった科目もやれるように必ずなる。

●実は、誰でも参加者と受験生の間をウロウロするものなのだ。だからこそ、ただじっと待っているのではなく、順を追って動くこと、その快さを味わえるように工夫することが大事なのだ。

(小林)

模擬テストについて

●新学年になって、もうすぐ二カ月が経とうと

しています。受験生諸君の勉強のはかどり具合はいかがでしょうか。さて、この時期からは模擬テストを受ける回数も多くなっていくと思います。そこで、今回は模試の受け方について少し述べてみたいと思います。



●まず、模試は出来るだけ数多く受けるべきです。今受けてもまだ力がついていないからダメだとか言っているのは話になりません。自分のできていないところを把握するために模試は絶対の機会です。したがって積極的に受けるべきです。ただし、ただ受けているだけでは大きな成果は得られません。せっかく受けるのですから最大の成果が得られるようにしたいものです。

●入試には時間的制限があります。限られた時間内に問題を解かなければなりません。その訓練の場として模試は最適です。本番入試のつもりで模試に取り組むことが大切です。緊張感をもって臨みましょう。また、模試の時に時間が大量に余るようでは基礎力不足です。(全問出れて時間が余るならば別ですが) 早く、もう少し時間があつたらもっと解けたのという状態にもつていかなくはなりません。もう少し時間があればの状態まで達しているということは、言い換えると入試で戦えるレベルにまでは達していることを意味します。これから合格レベルに達するように努力していけばよいのです。ではそのために模試をいかに活用するか。

●模試は復習が命です。復習しない模試ではその効果はほとんどないと言っても過言ではありません。しかも、模試で問われる内容は重要な部分がほとんどです。入試では、全体の二割の

内容から八割が出題されると言われますが、模試はこの重要な二割の部分を教えてくれているのです。したがって、模試の復習は極めて効果的な受験勉強となるのです。特に大学受験生用の模試には、分厚い解答解説がついています。これを利用して手はありません。解説をしっかり読んで、自分が理解していない事項や考え方を確実に身につけていくのです。徹底的に復習して次には出来るようにしていきます。この徹底こそがあなたの力を伸ばしてくれます。同じ誤りを繰り返すようでは話になりません。完全に身につくまで繰り返しことです。残された時間を有効に過ごすために、模試の活用を考えてください。(村上)

震災雑感

●あの日、あの瞬間、私は、電車の中にいた。初期微動を感知して停止した電車は、直後の本震によってゴムまりのように激しく揺れ、その車内で、私は死というものを強く意識した。

●あの日、何が起きていたのか。後日動画サイトで、地震発生時のNHKの映像を観た。国会中継の途中に緊急地震速報が出て十数秒、画面が小刻みに揺れ、国会議員も天井を見上げ始めた時、突然スタジオのこわばった表情のアナウンサーの映像に切り替わった。「ここで、地震・津波関連の情報をお伝えします。東京のスタジオも大きく揺れています」画面が左右に大きく揺れ、機材の激しくぶつかる音を



マイクが拾う。「揺れてるよー東京！撮ってー」興奮したディレクターの怒声がそのまま流れるほど混乱した現場。アナウンサーもかなりの恐怖を感じていたはずだ。しかし、彼のアナウンスは大変冷静であった(外国人からは、その後、大津波警報が出たと同時に各国語でのアナウンスを始めたNHKの迅速さが高い評価を得たそうである)。それが、無秩序に転落する寸前の世界を必死に繋ぎとめていた。私は、そのプロ意識に圧倒されるとともに、混乱時において秩序のイメージが保たれることがいかに重要か、実感した。

●二十四年前、チェルノブイリ原発の事故を契機に、日本で脱原子力発電の運動が起こった。しかし、「まさか、日本では」と高をくくっていた私がいた。実際にあの時には何も起こらなかったし、十四年は危機感を忘れさせるには十分すぎる年月だった。だが、核災害は、現実となった。私たちの想像力の欠如をついて。私は次世代に対する罪人となった。

●小松左京の「日本沈没」は、四十年前の小説だが、既に、東日本大震災のような広い範囲にわたって複数の地震が連鎖的に発生する「超広域震源地震」という描写が出てくる。また、生田直毅「原発・日本絶滅」(一九八八年・絶版)は、東海原子力発電所がメルトダウン後に爆発し、放射性物質が大量漏出した際の首都圏の混乱ぶりを詳細に描いている。作家という職業人の想像力に驚嘆すべきか。むしろ、現実が虚構を凌駕していることが恐ろしい。

●決して忘れないであろう言葉がある。私は、



それを、偶然ニュースで聞いた。避難所となった体育館で行われた、ある中学校の卒業式での答辞の言葉である。

「防災教育といえば、わたしたちの階上(はしかみ)中といわれるくらい、防災には力を入れてきました。それでも、自然の力は大きく、災害の前に、わたしたちは無力で、(嗚咽しながら)大切なものが容赦なく奪われていきました。(再び嗚咽。顔を上に向け、必死に涙をこらえて、辛くて、たまりません。(必死に涙をこらえて) それでも、私たちは天を恨まず、助け合って生きていこうと思います。それが私たちの使命だからです。」

苦しみとは個人にとつて絶対的なものだ。本質的に他人とは完全に共有できない。だから、自分の苦しみは誰にもわかってもらえないと吐き捨てることもある。だが、未曾有の災害を経験しながらも「天を恨まず」と言った彼の言葉は、自分の苦しみを相対化し、客観化する、ひとつの価値をもたらすものではないだろうか。少なくとも私は、これから苦境に立ったとき、彼の言葉を思い出し、自分の苦しみを客観視して何度も乗り越えていくことだろうと思う。

●最後に、小松左京の短編「物体O」の中の言葉を引用したい。日本が大災厄に見舞われたのち、建立された慰霊碑にこう刻まれる。

「人は災厄に逆らえない。しかし、災厄もまた人をほろぼし去ることはできないだろう。」

(関)

▼▲継続希望の方へ▲▼

- ▶転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。
- ▶在籍していた教室までご連絡下さい。